

乞食者が詠ふ二首

三八八五番

いとこ 汝背の君 居り居りて 物にい行くとは
 韓国の 虎といふ神を 生け捕りに 八つ捕り持
 ち来 その皮を 畳に刺し 八重畳 平群の山
 に 四月と 五月との間に 薬狩 仕ふる時に
 あしひきの この片山に 二つ立つ 櫟が本に
 梓弓 八つ手挟み ひめ鏝 八つ手挟み 鹿待
 つと 我が居る時に さ雄鹿の 来立ち嘆かく
 たちまちに 我は死ぬべし 大君に 我は仕へむ
 我が角は み笠のはやし 我が耳は み墨埴 我
 が目らは ますみの鏡 我が爪は み弓の弓弭
 我が毛らは み筆はやし 我が皮は み箱の皮に
 我が肉は み膾はやし 我が肝も み膾はやし
 我がみげは み塩のはやし 老いはてぬ 我が身
 一つに 七重花咲く 八重花咲くと 申しはやさ
 ね 申しはやさね